

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## De los nombres de Cristo y el ideal bucólico

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2014-03-01<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 野村, 竜仁, Nomura, Ryuji<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1838">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1838</a>         |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 『キリストの御名について』における牧歌的理想

野村 竜 仁

### 1. はじめに

16世紀スペイン文学の特徴の一つとして、牧歌文学の隆盛を挙げることができるだろう。牧歌の起源は古く、その祖形は古代ギリシャの詩人テオクリトスに遡る。その後、古代ローマの詩人ウェルギリウスによって「羊飼いたちの国、恋と詩の国」<sup>1</sup>としてのアルカディアを付与され、ルネサンス期のイタリアにおいてペトラルカなどに継承される。16世紀になると、サンナザーロがナポリの宮廷社会をモデルとした詩文混合体の長編詩『アルカディア』を著わし、その影響はイタリア以外の多くの地域へと及んだ。

こうした牧歌の伝統に連なるスペイン文学の作品としては、フアン・デル・エンシーナの牧人劇やガルシラーソ・デ・ラ・ベーガの牧歌などがあり、さらにホルヘ・デ・モンテマヨールの『ディアナの七つの書』が嚆矢となり、牧人小説がその隆盛を示すことになる。ギリシャ・ローマの牧歌的伝統を踏襲し、様式化された風景の中で愛の葛藤が語られる『ディアナの七つの書』は、後の作家に影響を与え、ガスパール・ヒル・ポーロはその続編として『恋するディアナ』を著わし、またセルバンテスの『ラ・ガラテア』やロペ・デ・ベーガの『アルカディア』などの作品が生み出されてゆく。

本稿で取り上げる『キリストの御名について』（以下『御名』と略）の作者フライ・ルイス・デ・レオンは、詩人としても名をはせた人物であり、牧歌の源泉であるウェルギリウスの『牧歌』のスペイン語訳なども手がけている。『御名』は、厳密な意味での牧歌や牧人小説ではなく、キリストに与えられた名前を考察する対話篇である。しかしアバリエ＝アルセやフランシスコ・ロペス・エストラダ等によって、その牧歌的な要素が指摘されている<sup>2</sup>。

そうした指摘を踏まえつつ、本稿では『御名』のもつ牧歌的な要素と、その自然観との関係について若干の考察を加えてみたい。

1 ブルーノ・スネル、『精神の発見』（新井靖一訳）、創文社、2003年、p.494.

2 Cf. Juan Bautista Avallé-Arce, *La novela pastoril española, segunda edición corregida y aumentada*, Madrid, Ediciones Istmo, 1974; Francisco López Estrada, *Los libros de pastores en la literatura española*, Madrid, Editorial Gredos, 1974.

## 2. フライ・ルイス・デ・レオンの作品と牧歌

フランシスコ・ロペス・エストラダは、牧歌文学を論じた浩瀚な著書『スペイン文学における牧人の書』の中で、『御名』について次のように述べている。

名高きラ・フレチャの菜園こそ、高尚な対話の舞台であり、この作品における智慧の出発点となっている。その描写は、それのみでも賛嘆すべき芸術作品としての観がある。菜園、樹木、草本、泉、並木道、川がその枠組みを形作ってゆき、そこに牧人が現れないことがむしろ奇跡と言えるほどである<sup>3</sup>。

『御名』は、サラマンカの街の郊外を舞台とし、上記のような牧歌的な場所で交わされる対話篇である。登場するのはマルセーロ、サビーノ、フリーアノという三人の聖アウグスティヌス会の修道士であり、作者自身を仮託したとおぼしき年長のマルセーロが中心となって、キリストを意味する様々な名前について論じる。すでに述べたように、『御名』は厳密な意味ではいわゆる牧歌的な作品ではない。その一方で、彼の手になるウェルギリスの訳詩との関連性も指摘されている<sup>4</sup>。

ウェルギリウスの牧歌は、早くはファン・デル・エンシーナによって1496年にスペイン語に訳され、その後もファン・フェルナンデス・デ・イディアケスやディエゴ・ヒロン、フェルナンド・デ・エレラなどの文人が訳詩を手がけている<sup>5</sup>。フライ・ルイス・デ・レオンもその一人に数えることができ、逐語的な翻訳というよりも詩文としての芸術性が重視しながら<sup>6</sup>、ウェルギリウスの10篇の牧歌を訳している。それらの訳詩は、1631年ケベードの手によって世に送り出された。

前述のように、フライ・ルイス・デ・レオンは詩人であるとともに、神学を講じる聖職者としての顔を持っている。彼にとって世俗的な起源を持つ牧歌は、宗教的な理想と結びついている。宗教的な面からフライ・ルイス・デ・レ

3 Francisco López Estrada, *op. cit.*, p.197.

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

La tan celebrada huerta de la Flecha, en la que transcurre la sabia conversación, es un punto de partida para la inteligencia de la obra; su descripción es ella sola una obra de arte sorprendente: huerta, árboles, plantas, fuentes, alameda, río, van formando el marco, y casi es de milagro que no aparezcan pastores.

4 Virgilio, *Bucólicas, traducción de Fray Luis de León*, Ed. de Antonio Ramajo Caño, Madrid, Ediciones Castalia, 2011, pp.69-70.

5 *Ibid.*, pp.56-64.

6 *Ibid.*, p.69.

オンと牧歌との関係を見るうえで重要と考えられるのが、彼の手になる『雅歌』のスペイン語訳と、その解説書である。

『雅歌』は旧約聖書に収められたテキストであり、婚礼についての詩歌作品としての体裁を有している。その中で語られる花婿と花嫁は、古来、神とイスラエル、あるいはキリストと教会などのアレゴリーとして解され、また花嫁を信者の魂とする、いわゆる花嫁神秘主義的な解釈も付与されてきた<sup>7</sup>。

フライ・ルイス・デ・レオンによるスペイン語版『雅歌』は、元々は修道女の求めに応じて書き始められたものであった<sup>8</sup>。その後、正式に刊行されることなく回読され、フライ・ルイス・デ・レオンに対する異端審問のきっかけとなる。対抗宗教改革の時代を迎えていたスペインにおいて、聖書の俗語への翻訳は禁じられた行為であり、フライ・ルイス・デ・レオンは1572年から1576年まで審問のために投獄されている<sup>9</sup>。

審問では、聖書の解釈についてのフライ・ルイス・デ・レオンの意見も問題視された<sup>10</sup>。フライ・ルイス・デ・レオンによる『雅歌』の翻訳および解説の特徴として、字句的な解釈も排除していない点を挙げるができるだろう<sup>11</sup>。『雅歌』の原語であるヘブライ語に通じていたフライ・ルイス・デ・レオンは、その文献学的な知識を開陳しながら、テキストの文字通りの意味についても詳述する。

「なぜなら、あなたの名前はふりまかれた香油」。対応するヘブライ語の言葉の語義に従えば、「ふりまかれた」の意味するところは、コップに分ける、あるいはある容器から別の容器に移し替えることで、これはそうすることによって良い香りが振りまかれ、よりよく知覚されるからである。<sup>12</sup>

こうした字句的な解釈を踏まえて、フライ・ルイス・デ・レオンは『雅歌』のテキストにのぞんでおり、解説の冒頭でも、このテキストを愛し合う男女が

7 ペーター・ディンツェルバッハー、『神秘主義事典』（植田兼義訳）、教文館、2000、pp.99-100.

8 Fray Luis de León, *El Cantar de los Cantares de Salomón*, Ed. de José María Bécerra Hiraldo, Madrid, Ediciones Cátedra, 2003, p.18.

Cantar p.18.

9 *Ibid.*, p.12.

10 *Ibid.*, pp.18-20.

11 *Ibid.*, pp.20.

12 *Ibid.*, pp.108.

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

*Porque es unguento derramado tu nombre. Derramado quiere dezir, según la propiedad dela* ↗

交わす牧歌として位置づけている<sup>13</sup>。

本稿で論じる『御名』において、牧歌的要素が最も現れているのは第一書の「牧人」の章であろう。「牧人」を含めた第一書には、主に自然物に関連するキリストの名前が多く挙げられており<sup>14</sup>、「若木」や「山」などの章では、自然の豊饒さをキリストの性質として述べている。「牧人」の章では、そうした豊饒さに加えて、牧歌的な自然の持つ純粹さや始原性が強調されている。

キリストは野に住まい、野天を楽しみ、孤独と静寂を愛し、生命とともにざわめいている万物の沈黙に喜びを見いだす。野において感得されるものこそ、目に見えるものの中で最も純粹な存在であり、素朴であり、それが源となって組み合わされ、混ぜ合わされることによって万物が生まれてくる。栄光に満ちた我らの善が住まうその生命の場所こそ、純粹なる真実にして簡朴なる神の光であり、存在する万物の、もっとも明白なる源であり、起源となってあらゆる被造物を形成する根源なのである。<sup>15</sup>

キリストの「牧人性」とともに語られるこうした牧歌的な自然は、素朴さ、あるいは可視物における最も純粹なものを意味していると考えられる。こうした自然についての概念は、フライ・ルイス・デ・レオンの持つ言語観との類似性を感じさせる。『雅歌』の釈義と同じく、フライ・ルイス・デ・レオンは『御名』においてもヘブライ語の知識を活用している。フベンティノー・カミネロによれば、フライ・ルイス・デ・レオンにとってヘブライ語は、言うなれば原初の言葉であり、それゆえ神の言葉として読み説くべき無限の意味が込められたものとして位置づけられている<sup>16</sup>。

∨ palabra hebrea a quien responde, repartido en vasos o mudado de vnas bugetas en otras, porque entonces se esparge y se siente más su buen olor.

13 *Ibid.*, p.104.

14 Eugenio de Bustos, «Ritmo semántico en Fray Luis de León», en *Fray Luis de León: historia, humanismo y letras*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, 1996, p.361.

15 Fray Luis de León, *De los nombres de Cristo*, Ed. de Cristóbal Cuevas García, Madrid, Ediciones Cátedra, 1997, p.225.

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

Bive en los campos Christo, y goza del cielo libre, y ama la soledad y el sossiego, y en el silencio de todo aquello que pone en alboroto la vida tiene puesto él su deleyte. Porque assí como lo que se comprehende en el campo es lo más puro de lo visible, y es lo senzillo y como el original de todo lo que dello se compone y se mezcla, assí aquella región de vida, adonde bive aqueste nuestro glorioso bien, es la pura verdad y la senzillez de la luz de Dios, y el original expresso de todo lo que tiene ser, y las rayzes firmes de donde nascen y adonde estriban todas las criaturas.

16 Juventino Caminero, *La razón filológica en la obra de Fray Luis de León*, Kassel, Edition Reichenberger, 1990, p.39.

中世の説教師や哲学者は自然を聖書と並ぶ書物として解釈し<sup>17</sup>、そうした自然観は15世紀のスペイン人の医師ライムンド・フォン・ザブンデや、トマソ・カンパネッラなどに継承されてゆく<sup>18</sup>。16、17世紀には、自然を聖書に次ぐ二冊目の書とする考えが流布しており<sup>19</sup>、こうした思潮がフライ・ルイス・デ・レオンに影響を与えていた可能性も考えられる。「目に見えるものの中で最も純粋な存在」として自然は、聖書の言葉であるヘブライ語と同じく、フライ・ルイス・デ・レオンにとって根源的な要素へと遡及するための指針となるのではないか。その場合、『御名』は原典を精査する形で、聖書と自然という二つの書物を読み解こうとした試みとして解釈することができるだろう。

### 3. フライ・ルイス・デ・レオンが描く牧歌的自然の特徴

牧歌には「都会対田舎」という定型的な対立軸があり、この時代のスペイン文学を繙けば、たとえばアントニオ・デ・ゲバーラの『宮廷を蔑み田園を称える書』(*Menosprecio de corte y alabanza de aldea*)のタイトルなどにもその一端をうかがうことができる。こうした対立軸は本来異教起源のものだが、アバリエ＝アルセによれば、『御名』においては異教的な理想郷としてのロクス・アモエヌス (*locus amoenus*) と、福音的な牧人像が融合している<sup>20</sup>。

『御名』の中では、都会に対する自然の素晴らしさについて、次のように述べられている。

しかし、牧人たちは素朴で、悪徳に犯されていない魂を持つゆえ、牧歌的な愛は純粋なもので、良き目的に向かうように整えられている。また野には道を誤らせるようなものではなく、そこでの孤独な生は穏やかにして自由な営みを享受させるものゆえ、愛を鋭敏かつ実に生き生きとしたものとする。さらにそれが空、大地、その他の自然の要素の、曇りなき姿を常に享受できることによって助長される。なぜならその光景そのものが明瞭なるイメージ、言いかえれば、純粋にして真なる愛の学び舎のごときものだからである。というのも、そこには万物が秩序立ち、友愛によって互いに結ばれていることが明示されており、言うなれば偉大なる調和に資するようにそれぞれが抱擁し合い、時おり他者に応じて互いの力を伝え合い、往還しながら助け合い、すべてが混合する。そうした混合と集合から、空と大

17 エルンスト・ローベルト・クルツィウス、『ヨーロッパ文学とラテン中世』(南大路振一他訳)、みすず書房、1971、pp.464-467.

18 エルンスト・ブロッホ、『ルネサンスの哲学』(古川千家他訳)、白水社、2005、pp.69-72.

19 アリスター・E・マクグラス、『科学と宗教』(稲垣久和他訳)、教文館、2003、p.59.

20 Juan Bautista Avalle-Arce, *op. cit.*, p.23.

地を美しく飾る実りが結ばれ、絶え間なく生み出される。こうした点から、牧人たちは他の者たちよりも恵まれている。<sup>21</sup>

『御名』において、牧歌的な自然は始原性を有する、理想化されたものとして捉えられている。そうした自然には、通常の世界における変化の過程や、運動性といった論点は見られない。自然の事物の性向などに言及しつつも、たとえば太陽を中心とし、上下の運動性を有するカンパネラの自然観や、新プラトン主義とユダヤ教を結びつけたレオーネ・エブレオの『愛の対話』などのように、自然哲学的な視点は希薄である。『御名』では、人間を含めた形而下の現象については詳述されず、キリストを象徴する理想としての自然の姿が強調されている。

始原性を有する理想化された自然としては、たとえば『アゾロの談論』で語られる「理想世界」を想起することができるだろう。ピエトロ・ベンボによって著された『アゾロの談論』は三巻からなる対話篇で、イタリアのアゾロの宮廷を舞台に、「愛」をテーマとした議論が交わされる。その最終巻において、「理想世界」について次のように述べられている。

[...] 理想世界にも、この世界と同じように、大地があつて緑を繁らせ、草木をはぐくみ、動物をやしなっている。海があつて、陸地と入り混じっている。空気があつて、陸と海を囲んでいる。火がある。月がある。太陽がある。星々がある。天球がある。ところが、理想世界では草が枯れることはない。樹木が古びることも、動物が死ぬことも、海が荒れ狂うことも、大空が曇ることもない。火が燃えさかってもものを焼き尽くすこともなければ、星辰なり天球なりが、休むいとまもなく回転することもない。理想世界では、いかなるものも変化しない。[...] 理想世界は、あるがままの状態であつたりしている。いかにも、最高の幸福、いやしくも欠けたると

21 *De los nombres de Cristo, op. cit., p.223.*

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

Mas el pastoril, como tienen los pastores los ánimos sencillos y no contaminados con vicios, es puro y ordenado a buen fin; y como gozan del sosiego y libertad de negocios que les ofrece la vida sola del campo, no aviendo en él cosa que los divierta, es muy bivo y agudo. Y ayúdales a ello también la vista desembaraçada, de que contino gozan, del cielo y de la tierra y de los demás elementos; que es ella en sí una imagen clara, o por mejor dezir, una como escuela de amor puro y verdadero. Porque los demuestra a todos amistados entre sí y puestos en orden, y abraçados, como si dixésemos, unos con otros, y concertados con armonía grandíssima, y respondiéndose a vezes y comunicándose sus virtudes, y passándose unos en otros, y ayuntándose y mezclándose todos, y con su mezcla y ayuntamiento sacando de contino a luz y produziendo los frutos que hermocean el ayre y la tierra. Assí que los pastores son en esto aventajados a los otros hombres.

ころなどなき幸福に、満たされているのだからね。こうして、最高無比の幸福を身籠もって、生みだすにいたる。つまり、あなたをご覧になっている、この物質世界が生まれてくる。<sup>22</sup>

ここで語られている理想世界とは、万物の原型がやどる、プラトンのなアイデア界と言えるだろう。『アークロの談論』の場合、こうした「理想世界」の下に、愛に司られた地上の世界や星辰の世界が存在している。一方、『御名』では自然や星辰についての言及はあっても、『アークロの談論』のような階層的な自然観が語られることはない。フライ・ルイス・デ・レオンが自然について強調するのは、先の牧人に関する引用の一節にあるように、静寂さと、それにとまなう調和である。

フライ・ルイス・デ・レオンの理想的な世界観としてしばしば指摘されるのが、夜の静寂、あるいは星辰の調和である。夜の静寂は彼の詩作品などの主要なテーマとなっており、その重要性はつとに指摘されている<sup>23</sup>。『御名』では、第二書の「平和の君主」の冒頭で、星々の輝きが平和の象徴として捉えられている。

平和がどれほど愛すべきものか、もしも理性やそれ以外の道によって示されないとしても、今こうしてわれわれの前に現れた美しい天の姿が、またその中で輝くこれらの星々の互いの調和が、そのことについての十分な証拠を示している。というのも、今われわれが天の中で目にし、目を楽しませてくれるものは、平和以外の、あるいは惑うことなき平和の完璧なイメージ以外の、一体何であると言うのか。<sup>24</sup>

クリストバル・クエバスが述べているように<sup>25</sup>、フライ・ルイス・デ・レオンにとって、夜は否定的なものを象徴すると同時に、静寂をもたらす肯定的

22 ピエトロ・ベンゴ、『アークロの談論』（仲谷満寿美訳）、ありな書房、2013、pp.241-242.

23 *De los nombres de Cristo, op. cit.*, p.405.

24 *Ibid.*, p. 404.

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

Quando la razón no lo demostrara, ni por otro camino se pudiera entender cuán amable cosa sea la paz, esta vista hermosa del cielo que se nos descubre agora, y el concierto que tienen entre sí aquestos resplandores que luzen en él, nos dan dello suficiente testimonio. Porque ¿qué otra cosa es sino paz o, ciertamente, una imagen perfecta de paz, esto que agora vemos en el cielo y que con tanto deleite se nos viene a los ojos

25 Cristóbal Cuevas, «Fray Luis de León y la visión renacentista de la naturaleza: estética y apologética», en *Fray Luis de León: historia, humanismo y letras*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, 1996, pp.376-377.



なものとしても捉えられている。否定的な夜とは、地上の夜、たとえばフライ・ルイス・デ・レオンを閉じ込めた監獄のごとき意味を帯びており、肯定的な夜とは、前述の「平和の君主」の箇所を踏まえれば、星辰の世界、あるいはそれを越えたイデア的な領域において実現されるものとして考えることができるだろう。

イタリアで著された『アーズロの談論』では、前者の否定的な夜、つまり人間や形而下の事物についても語られつつ、神に近い領域へと階層的に敷衍してゆく<sup>26</sup>。一方『御名』では、地上的なものが語られていても、それらは階層的な世界観としては提示されない。『御名』で力点が置かれているのは、理想とされる世界と、それを鏡面のごとく受容する人間の行為である。

こう言いながら、マルセーロは穏やかで純粋な水面に目を向けた。そこには鏡面のごとく、天の美と星々のすべてが輝いており、まるで美しく光る星々を散りばめたもう一つの天のようであった。彼はそちらに手を伸ばし、指し示すようなしぐさの後、次のように言った。

「我々は今ここで、星の輝くもう一つの天のごとき水面を見ているが、これこそ、我々が恩恵の性質を知るための例として、多少なりとも役に立つものである。なぜなら、この水には鏡のごとくなるための条件がそろっており、それゆえそこに受容された天のイメージは、我々から見た場合、水をそれ自身の似姿としている。すでに述べたように、恩恵もこれと同じく魂にもたらされ、そこに据えられると、目で見てもわからないが、まぎれもない事実として、魂は主の性質を与えられ、神に近いものとされる。そして本来の性質を失わずに変化するようなやり方で、被造物は天に変化させられる。<sup>27</sup>

『御名』の場合、星辰に目を向けつつもその視線は魂に、つまり自分の内面

26 前掲ピエトロ・ベンボ, pp.226-243.

27 *De los nombres de Cristo*, op. cit., pp.422-423.

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

Y diciendo esto Marcello, puso los ojos en el agua, que yva sossegada y pura, y reluzían en ella como en espejo todas las estrellas y hermosura del cielo, y parecía como otro cielo sembrado de hermosos luzeros, y, alargando la mano hazia ella y como mostrándola, dixo luego assí:- Aquesto mismo que agora aquí vemos en esta agua, que parece como un otro cielo estrellado, en parte nos sirve de exemplo para conocer la condición de la gracia. Porque assí como la imagen del cielo recebida en el agua, que es cuerpo dispuesto para ser como espejo, al parecer de nuestra vista la haze semejante a sí mismo, assí, como sabéys, la gracia venida al alma y assentada en ella, no al parecer de los ojos, sino en el hecho de la verdad, la assemeja a Dios y le da sus condiciones dél, y la transforma en el cielo, quanto le es possible a una criatura que no pierde su propia substancia, ser transformada.

へと向けられてゆく。つまり『御名』で力点が置かれているのは、自然において顕現する神ではなく、魂に投影される神の姿と言えるだろう。『アーズロの談論』において神の領域に据えられていた理想世界は、『御名』では魂の中に現出させるべきものとして提示されていることがわかる。

#### 4. 多様性による内面的充実

フライ・ルイス・デ・レオンは、聖書と自然という二つのテキストにおける原初的な要素に着目するだけでなく、そこからキリストを語る上で有用な意味内容を抽出する。たとえば「牧人」と同じく第一書で語られる「山」の章では、原語であるヘブライ語の語義を踏まえ、自然物としての山が有する機能へとイメージを広げてゆく。

[...] 聖なる書物が、その原初において記されたヘブライ語では、山を指す言葉は、その原義としては我々のカスティーリャ語の妊娠を意味している。[...] この名前の語るところは極めて適切であり、というのも、それらは大地から腹のように丸く盛り上がり、膨らんだ形をしており、しかも空洞の弛んだ腹はなく、妊娠のようにしっかりと中身が詰まっている。加えて受胎と同じように、まず自分の中に抱えて、時が満ちれば、地上において尊ばれるほとんどすべてのものを出産し、世に送り出す。様々な種類の木々を生み出し [...] どこよりも多くの草を育み [...] いたるところで泉や川の源流を生じさせる [...] <sup>28</sup>

こうしたイメージの広がりや、詩人としてのフライ・ルイス・デ・レオンの素養をうかがわせるとともに、神について講じる神学者としての、教育的な要請を満たすものとも言える。サラマンカ大学で教壇に立っていたフライ・ルイス・デ・レオンは、残されたその講義録の中で次のように述べている。

28 *Ibid.*, pp. 246-247.

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

[...] en la lengua hebrea, en que los sagrados libros en su primera origen se escriven, la palabra con que el monte se nombra, según el sonido della, suena en nuestro castellano el *preñado*, [...] Y dízeles aqueste nombre muy bien, no sólo por la figura que tienen alta y redonda y como hinchada sobre la tierra, por lo qual parecen el vientre della, y no vazío ni floxo vientre, mas lleno y preñado, sino también porque tienen en sí como concebido, y lo paren y sacan a luz a sus tiempos, casi todo aquello que en la tierra se estima. Produzen árboles de diferentes maneras [...] Paren yervas, más que ninguna otra parte del suelo [...] por la mayor parte, se conciben las fuentes y los principios de los ríos [...]

[...] なぜなら、限られた有限の悟性は、組み合わせたり分割したりしながら実存を知る。これは、単独の概念によって無限であるものを理解することができず、多層的な知識がなければ単純なるものも知りえないためである。このようにして、われわれは神性を個々の部分において知ることになり、そうした部分性ゆえに、神性に対して多様な名前と多様な完璧さを付与する。しかしながら、その実存においては、決して多様なものではない。<sup>29</sup>

『御名』で複数の名前を取り上げるのは、人間が神について語る際の、人間的な必然性に基づいている。人間の前に顕現する神の属性はその影のごときのものであり、フライ・ルイス・デ・レオンは、文献学や時代が提供する全ての学問を駆使して<sup>30</sup>、聖書や自然の中に示される、神に最も近い純正な要素に視線は向ける。そこで見出された原初的なイメージに基づき、キリストの属性を多面的に読み解こうとする。

これは、『御名』という書物の基盤である名前そのものについての考え方とも符合する。名前の理解とは、それが指し示す「それぞれ一つひとつの個体のうちに他の全てが含まれ、個体でありながら、それに可能な全てのものになる」<sup>31</sup> ことの意味である。こうした名前の属性は、神の似姿としての人間の役割とも重なるものとして捉えられている。

事物の完成は、我々一人ひとりが一つの完成された世界となることにかかっている。つまり万物が私の中に存在しつつ、私が私以外の万物の中に存在し、私が万物の存在を所有しつつ、万物のそれぞれが私の存在を所有

29 Fray Luis de León, *Dios y su imagen en el hombre, Lecciones inéditas sobre el libro I de las Sentencias (1570)*, Ed. de Santiago Orrego, Pamplona, Ediciones Universidad de Navarra, 2008, p.83.

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

[...] porque el entendimiento, que es limitado y finito, conoce la realidad componiendo y dividiendo, no puede comprender mediante un único concepto lo que es infinito, ni puede conocer lo que es simple sino con un conocimiento múltiple. De este modo, así como conocemos lo divino por partes, así también le atribuye por partes diversos nombres y diversas perfecciones que, sin embargo, en la realidad no son diversas de ningún modo.

30 Eugenio de Bustos, «Algunas observaciones semiológicas y semánticas en torno a Fray Luis de León», en *Academia Literaria Renacentista. I: Fray Luis de León*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca, 1993, p.113.

31 *De los nombres de Cristo, op. cit.*, p.155.

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

[...] cada una dellas tenga en sí a todas las otras, y en que, siendo una, sea todas quanto le fuere possible [...].

するという形で、世界の機構全体が相互に連結し、包摂しあい、多様な集合が統一されなければならない。混合することなく混合し、多数性を維持しながら多数ではなくなり、多種多様なものが目の前で展開するように広がりつつも、統一性がそのすべてを御し、君臨しなければならない。このようにして、被造物は神に近づくのである [...] <sup>32</sup>

みずからが完全なる世界となるため、人間は万物を包摂しなければならない。その媒介となるのがキリストの名前である。『御名』はキリストの人性を論じることを目的としており <sup>33</sup>、それゆえ名前から敷衍した様々なイメージは、最終的にキリストの人性、つまり小宇宙として人性 <sup>34</sup> を論じる形で収斂する。キリストは万物をつなぐ要として存在し、キリストによって統べられる純正かつ多様なイメージを魂に透写することによって、内面世界の充溢が図られる。

『御名』の主眼のひとつは、キリストによる人間の健全化と救済を語ることである。そのためにフライ・ルイス・デ・レオンが提示した方途には、キリストを中心とした内的世界の創造とその充溢という側面があると言えるだろう。

## 5. 結びにかえて

『御名』では、キリストを媒介とした世界の理解が、救済の方途として説かれている。イデア界のごとく理想化された世界の理解は、恩寵となって人間の意志を矯正する。フライ・ルイス・デ・レオンにとって、人間の罪はその意志が損なわれていることに起因する。その原因となったのが原罪であり、キリストはアダムの原罪によって意志が損なわれた人間を救済するために、その意志を正しい方向へと向かわせる。こうしたキリストによる救済は、人間に与えられる第二の法として、『御名』で語られている <sup>35</sup>。

意志の救済という点で、『御名』はモンテマヨールの『ディアナの七つの書』を想起させる。牧人小説の嚆矢となったこの物語には、フェリシアという賢女

32 *Ibid.*, pp.155-156.

日本語は拙訳で、原文は以下の通り。

Consiste, pues, la perfección de las cosas en que cada uno de nosotros sea un mundo perfecto, para que por esta manera, estando todos en mí y yo en todos los otros, y teniendo yo su ser de todos ellos, y todos y cada uno dellos teniendo el ser mío, se abrace y esclavone toda aquesta máquina del universo, y se reduzga a unidad la muchedumbre de sus diferencias, y quedando no mezcladas, se mezclen, y permaneciendo muchas, no lo sean; y para que, estendiéndose y como desplegándose delante los ojos la variedad y diversidad, vença y reyne y ponga su silla la unidad sobre todo. Lo qual es avezinarse la criatura a Dios [...].

33 *Ibid.*, p.170.

34 *Ibid.*, p.179.

35 *Ibid.*, pp.424-425.

が登場する。彼女は、報われぬ恋に苦しむ牧人シレーノたちに霊水を与える。霊水を飲んだ牧人たちは眠りに落ち、目覚めると恋の苦しみから解放される。こうしたフェリシアの存在について、訳書の解説で本田誠二氏は次のように述べている。

シレーノの方は霊水を飲むことによって出口のない人妻ディアナへの執着を断って心の自由を取り戻し、占有や嫉妬から解放され「彼を傷つけることのなかった他の誰とも同じように<よく愛する>ことができるようになった」（「第五の書」）。これを宗教的コンテキストで解釈すれば、俗愛を脱して聖愛（隣人愛）に目覚めたということになろう。おそらく作者はフェリシアの霊水によって象徴される神の恩寵なくしては、そうした回心はありえないと言いたかったのであろう。フェリシアという異教的な存在は、カトリック的コンテキストにおいては聖母マリアとイメージが重なってくる。<sup>36</sup>

作品としての体裁は異なるが、こうした恩寵による救済、特に愛の志向性の改善という点は、『御名』と共通している。またプラトン主義の影響や牧歌的な理想の提示などにも両作品の共通性を見ることができる。こうした牧人小説との比較も、いずれ機会を改めて行ってみたい。

---

36 ホルヘ・デ・モンテマヨール、ガスパール・ヒル・ポーロ、『ディアナ物語』（本田誠二訳）、南雲堂フェニックス、2003、「解説」、p.421.